

## 美食の極み－ケガニの巻

藤原 道夫

そうだ、ゆでたての毛蟹（ケガニ）を一匹丸ごと食べてみよう、そんな願望が沸いてきたのは二回目のコロナワクチン接種を6月上旬に終え、北海道旅行を思いついてからだ。

7月初め、東北・北海道新幹線を使い、4時間30分で函館に着いた。駅からぶらぶら歩いて通りに面した市場の店をのぞきながらホテルに向かう。ケガニが並んでいる店もあるので、期待が高まる。夕刻までまだ間があったので、時間つぶしに高田屋嘉兵衛の像が建っているあたりまで散歩に出かけた。帰り道、昔のレンガ造りの倉庫を利用した店がいくつかあり、ひやりとした気分で見ると、どこも人がまばらでまるで活気がない。

日が暮れかかる頃、ホテルで紹介してもらったケガニが食べられる店に向かう。市場の奥の角に位置する居酒屋だった。カウンターの隅に席をとり「ケガニを食べたい」というと、店のお兄さんがメニューを持って「実入りが100%のカニと80%のカニとがあります、80%の方が100g当たりの値段が半分くらいで、こちらの方が美味しいです」とのこと。考える余地はない、頼むとすぐに現物を持ってきて「これは如何でしょう、500gくらいの食べごろのカニです、ゆであがるのに40分くらいかかります」という。いわれるままだ。待つ間、バターじゃがをつまみながら薄い酎ハイをちびちび。周りを見ると、コの字形の広いカウンターに客はいない、向こう側のテーブル席や個室に何組かの人たちがいて、話し声がぼそぼそ聞こえる。すぐ後ろの方から絶えず演歌が流れてくる、耳障りなマイクの音だ。

昔の旅のことを思い浮かべる。特急「はつかり」は午後上野を発ち、10時間半余りかけて深夜青森に着く。ホームに降りると、皆が小走りに連絡船へと向かう。私たちも、訳が分からないまま、急ぎ足になっていた。青函連絡船に乗り、畳敷きの大部屋の隅に陣取って仮眠をとる。ひと眠りして目を覚ますと、人々がそわそわと起き上がって出口の方に向かっていく。未だ薄暗いうちに函館の棧橋に接岸、すると我先にと船を降り、小走りに長い連絡通路を列車のホームへと向かってゆく。私たちも、指定席をとっていたが、つつられて急ぎ足になり、函館発札幌行き急行「すずらん」の座席に落ち着いた。上野を発ってから16時間40分余かかっていた。札幌まではまだまだかかる。若い時の旅の懐かしい思い出だ。今は、朝に東京を発つと昼頃には函館に着き、ランチをとった後に観光なり散歩なりをして、夕食をのんびりと楽しむことができる。

小一時間経った頃だろうか、お兄さんがゆでたてのケガニが盛ってある大きな皿を運んできた。早速カニ用のホークを使って足の身を取り出し、じかに食べてみた。ほんのりと温かみのある身はケガニ特有の味に加えて甘味もある。これがケガニ本来の味なのだ！あとはレモンか甘酢を少しつけながら味わう。みそは思っていたより少なかったが、正真正銘蟹みその味だ。こうなると演歌も気にならない、夢中で身をほじくり出してはほおぼった、これぞ素朴ながら美食の極みではあるまいか。

少し落ち着くと、また昔の旅の思い出がよみがえってくる。ケガニのことをはっきり意識したのは、二回目の北海道旅行に出かけた時の車中だった。インターンの6月、Y君と私に加えてN君が旅行に参加した。函館から札幌に向かう急行列車が長万部（おしゃまんべ）に着いた時のこと、私はチップ・シシャモずしという弁当を珍しがって買うのに気をとられていた。と、N君がホームから戻ってきた。持っている新聞紙の包みから湯気が立っているような気がした。「ゆでたてのケガニを買ってきた、2匹で150円だった、皆で食おう」という。3人して膝をつき合わせてケガニをくるんでいる新聞紙を拵げ、ばらしながら手づかみでしゃぶるように食べた。小振りなので身はいくばくもない、たちまち食べつくした。味はほとんど覚えてない、長万部でケガニを食べたという事実のみ記憶に残った。

ケガニは東京でも食べることはできるが、はずれることもある。後日北海道に出かける機会が何度かあり、ケガニにありついた時、やはり本場で食べるのは違うな、と思ったものだ。特に記憶に残っているのは、根室に宿泊し、付近の湿地帯を見学する2泊3日のツアーに参加した時のこと。二晩とも蟹がたっぷり出てきた。ケガニだけでなく、タラバガニや花咲ガニも出てきた。みなうまかったのだが、私としてはケガニに軍配をあげたい。

カニに関連してもう一つ忘れ難いことがある。家内を伴って湖東三山の紅葉を見にいった時のこと、八日市（滋賀県）にある招福楼に寄って昼ご飯をとった。懐石料理コースの煮物椀にかにしんじょが出てきた。ズワイガニの身もたっぷり添えられており、そのうまさを堪能した。これは手をかけた美食の極み、といえるだろう。

大皿に盛ったケガニを食べつくし、思い残すことはなかった。とつぷりと日の暮れた人気のない大通りに出て、夏の函館を吹き抜けるさわやかな風を受けながらホテルに戻った。